

源氏物語におけるマホシとその格表現について

木 之 下 正 雄

Masao KINOSITA

「水が飲みたい」「話が聞きたい」という言い方と「水を飲みたい」「話を聞きたい」という言い方については、前者のようにガを用いるのが正しいとするのが通説であるが、^(註1) その根拠は次のようである。

- 1 言語事実として、ガが多くの人によつて標準的な言い方として話されている。
- 2 この事実は、タイの付いた動詞は自動詞化するという、文法的に正しい法則に立つ。
- 3 この事実は歴史的事実でもある。^(註2)

しかし(3)については、ガの方が新しい言い方であるという、全く相反する説もあつて、^(註3) 十分に明らかでない。(a)ガとヲは歴史的には果してどんな使用状況であつたのか、(b)もし古代にヲが使われており、しかも(2)の説が正しいとしたら、この両者はどのように説明さるべきであるか、このような問題が生ずるのである。

小論は、このような問題の解決の一環として、源氏物語におけるマホシについて考察したものである。結論から言えば、

- 1 ヲはかなり多く用いられている。
- 2 ヲは主に従属文に用いられている。
- 3 ヲとガは、表現のねらいにかなりの違いがある。
- 4 基本的にはガを標準と見るべきである。

ということになる。

I マクホシの四形式

マホシはマクホシの転だろつと言われる。他動詞—マクホシは、万葉集では次の四形式が考えられる。

- a 主体ガー（動作の対象ヲ—他動詞マクヲ）—ホリス（ホル）（ホシク思フは見えない）。
- b 主体ガー—希望の対象ヲ—（他動詞マク）ホリス
- c 主体ガー（動作の対象ヲ—他動詞マクノ）—ホシケレバ
- d 希望の対象ガー（他動詞マクノ）ホシケレバ

a は対象を包む動作を直接目標とした、主体の意志的な動作として表現した文である。万葉集には確かな例は見えないが、「はこやの山を見—まく近けむ」⁽³⁸⁵¹⁾、「行かまくを欲り」⁽⁷³⁶⁾などから、aも存在したろつと推察される。

対象ヲ—他動詞マク—ホリスはすべてa形式に考えられないこともないが、他動詞マクヲになつている例がないこと、マクホリの結合が緊密で「見まく欲りわがする」⁽¹²⁰⁵⁾のようになること、マホ

シク思フがa形式ではないこと、などを考えて、b形式を考えた。bは、他動詞マクがホリスの客語から修飾語へ、従つて対象が他動詞の客語からホリスの客語へ変つているが、希望を主体の意志的な動作として表現する点はaと同じである。

しかし情意は本来主体の意志的動作的のものでなくて、存在的のものである。情意の主体とは情意の存在の場である。情意の対象に、そのような性質状態を帯びさせる特定の媒介の場である。それで「それが私にはいやなのだ」のように=で表わされ得る。情意の対象は、情意を起させる性質状態にあるものと認められて、情意形容詞の主語となる。従つてホシは対象に対応し、他動詞マクはホシの限定作用をしているにすぎない。d形式である。「この仕事をして欲しい」「このペンは使つてもよい」「本が置いてある」(註4)と似ている。(頁1314, 2559, 2666)

主体又はその動作に叙述の重みをおいて、しかも希望のおのずからなる存在として表現したい場合もある。対象を包む動作が希望の対象になる。cの形式である。万葉にはcの例はないが、「今も見がほし一妹が姿を」(2284)「汝ら一本の舍利をば見まく願はしやいなや」(西大寺本飛勝王經187)、「見まくの欲しき君かも」(2554)などから、c形式もあつたろうと推察される。しかしホシは対象に対応するd形式が本来であつて、主体に重みをおく時は主体の動作として表現するb形式が普通であつた。

II ノーマホシの意味

源氏物語の時代に、見マーホシと感じられたか、見一マホシと感じられたかは分らない。

白川の滝のいと見まほしけれどみだりに人を寄せじものとや(後撰1087)註5

これは見マーホシケレと分れているが、次の理由から見一マホシのように感じられていたと思う。その理由は、マがマホシ、マウンという語に固定していること、何らの意味を持たないで接尾語とは感じにくいこと、見ルの概念の独立性から見マホシの「見」だけが独立に感じられやすいこと、などである。

源氏物語で「対象—他動詞マホシ」の例は主文14(ヲ1, 不明13), 従属文52(15, ヲ8, 不明39)である。ノ・ヲが用いられているのは従属文が主で、主文の場合は僅か1例である。これについて、ノの例がないのは主文の主語にはノ・ガを用いないからと思われるが、ヲは主文にも用いてよいのに1例しかないのは次のように考えられる。

(い) 他動詞マホシが主文の述語になつているのは、対象を叙述の題目として提示している場合が大部分である。これは格助詞を用いればガになるところである。

(ろ) 主文で「対象ヲ—他動詞マホシ」の言い方がしたい場合は、「主体—(対象ヲ—他動詞)マホシク—思フ」と言うのが正式で、またその用例が最も多い。

このように考えると、主文ではノ・ガの場合が多くてヲは少いと言える。そして従属文ではヲの方が優勢である。従つて、(イ)意味がどのように違うか、(ロ)従属文にはなぜヲ—マホシが多いかについて考える必要がある。

ノーマホシを紫式部が用いている例は、椎本47, 藤袴165, 若菜上388, 若紫183, 鈴虫207, 紫式部日記329(有明堂文庫)の6例である。すべて、マホシは対象について叙述している。

1 宰相の君の同じうは近きゆかりにて見まほしげなるを(権本47)

ゲナリは宰相の君の状態であつて、「宰相の君一見まほしげなり」のように対応する。そして見マホシは、八宮という特定の場において、宰相の君が、見たいという情意を起させるような性質状態にあることを表す。マクホシのd形式であつて、「宰相の君の」は叙述の題目になつている。もし「宰相の君を」とすれば、ゲナリは「見る」の主体八宮を承け、見マホシは八宮の状態について叙述することになる。

2 経に心を入れて読み給へるさま、絵にもかかまほし。(手習295)3 添ひ臥し給へる御火影、いとどめでたく、女にて見奉らまほし(番本41)

などでは主体は極めて軽いと思われるが、ノーマホシの用例は主体に重みのある場合が多い。

4 幼かりつるゆくへのなほ確かに知らまほしくて問ひ給へば(若衆183)5 宮の御事のなほ言はまほしければ(若衆上388)

2・3と違つて、主文であつたら「…を一まほしく思す」とb形式に言うであろう。即ち主体を題目に対象を客語にし、また題目に対応して「思す」を述語とするであろう。

2・3と違つて、4・5は情意の存在が特定の場(主体)においてであるが故に、主体は重要である。主体を題目におけば対象は客語になり(ノーマホシのA)、述語は「思す」になる。「を一まほしく思す」は主体についての第三者の客観的記述であり、マホシは主体の立場からの、主体の意識内容だけの表現である。そこでは、対象及び情意が存在するだけで、「思す」は不必要になる。即ちマホシで叙述する場合は対象は題目になる。4・5が、主文の場合と従属文の場合とで異なるのは、主文の場合は第三者の立場に立つので主体や「思す」が入用と思われるが、従属文ではそれは主文に譲つて、主体の立場からの記述になるからである。

2・3も、意識内容だけの表現である点は同様なのであるが、主体が一般的なものであるために軽く或は不必要に感じられている。このような場合、主文においても対象が題目になるのが普通である。情意文或は広く判断文(一般の形容詞を含む)は、主体の一般的或は特殊的に応じて主体を必要とする度合が異なるのである。以上のように、ノーマホシは対象を題目にした叙述であり、それは主体の立場からの表現であると言える。

III ノーマホシの意味

ノーマホシは源氏には8例あるが、4種類に分けて考えることができる。

A 主体を強く意識する場合

6 好き心あらむ人は気色ばみ寄りて人の御心ばへをも見まほしう、さすがにいかがとゆかしうもある御けはひなり(権本15)

7 残りとまれる人々も、中將は…。宮は…。(私へ)何事も思ふままにて生ける限りの世を過ぐさまほしけれど、残り給はむ(アナタへ)末の世などのたとしへなき衰へなどをさへ(私ガ)思ひ憚らるれば(藤裏葉250)

6は主体が明記されている場合で、幻325も同じである。7は主体は明記してないが、「中將は」「宮は」と対比的に主体「私」が強く意識されている。終りの「思ひ憚らるれば」がヲを取つている誤

りも主体を強く意識したからである。

源氏には対象—他動詞ガタシで、ノ24例に対して、ヲは3例に過ぎない。ガタシは他動詞との結合がマホシより緊密であつたが、ヲ—ガタシの3例はAに入るべき場合である。若紫207, 賢木389は共に従属文で主体明記の文であるが、

8 過ぎにし御事を忘れがたく慰めかね給ふめりし程に(繪巻257)

は、尼君を題目としてその動作を述べることを主にした文である。

このように主体が強く意識されるということは第三者の立場に立つことであり(7のように主体が話手である場合でも、客体化されていると考えられる)、対象は叙述の題目とならないで、主体に対立するもの或は主体の動作の対象として意識されがちである。

9 初時雨猿も小蓑を欲しげなり

10 由利子を私は好きだからといふこともあるが、それは欣二を私が好きでないといふ気持と離れ離れのものではなかつた。従つて由利子が好きだといふのは飽くまで精神的なものであつた。(高見順)

情意の主体を強く意識した所はヲになり、対象を中心に感じた所(従つて主体は文面に表れなかつた)はガになつている。

B 動作を重く見る場合

動作を強く意識すると、対象は動作の対象としてヲで表される。

11 わが君をば心ばせあり、物思ひ知りたらむ人にこそ見せ奉らまほしけれ(東屋16)

主文の唯一の例であるが、他の資料にはある。

12 別路を隔つる雲のためにこそ扇の風をやらまほしけれ(拾遺311)

「見す」「やる」が強く意識されたために、「君」「風」はその対象として意識されてヲになつたのである。Aのように主体が表面に出ていないが、動作を強く意識することは主体を強く意識することであり、対象を主体に対立するものとして意識することである。Aと本質的に違うものではない。

C 動詞の内部構造である場合

13 千夜を一夜なさまほしき夜の、何にもあらで明けぬれば(若菜下20)

「夜」を題目にしてその状態について述べている。マホシの対象は「夜」であつて「千夜を一夜になす」即ち動作の対象を包んだ全体が一つの動詞の働きをしている。その点Bと同じであるが、Bほど、動作「なす」従つてその対象としての「千夜」に重みをおいていない。また主体「人々」も一般性があるために、Bの場合ほど重要ではない。

更に重要な事は、Bは「(吾)—風をやら—まほし」の構造で、マホシは「吾」を主語とし、「風」を客語とする他動詞のような性格をもっている。しかるにCではマホシは「夜」を題目として、それについての叙述である。その「夜」が人々に千夜を一夜になす望みを起させるような状態にあることを表す。「千夜」はナスの対象であるが、マホシの対象としては殆ど意識されていない。「人々」

もまたマホシの主体として殆ど意識されていない。この文は「夜」を題目にし、「千夜を一夜になす」を動詞としたノーマホシ形式と考えられる。即ち「千夜を一夜になす」は一つの動詞の内部構造である。図式で表せば、**A・B**は「主体—(動作の対象—他動詞)—まほし」となり、**C**は「希望の対象—((主体)—動作の対象—他動詞)—まほし」となる。どちらも、動詞が対象を包んでマホシに係つていく構造で同じようであるが、**A・B**は、対象は動作の対象であると共に、希望の対象である点で、根本的に**C**と異なる。**A・B**では「主体—まほしく—思ふ」のようにマクホシのb形式に言うのが正式であるが、このような言い方をするとすることは、主体又は主体の動作を重くしながら情意を存在として表わそうとする心理的要求が強く、しかもこのように対象が他動詞だけに係る場合が他に認められるからである。

一つの成分が他の成分の一部分の概念に係ることは普通であるが、理論的に正しい場合と正しくない場合とがある。

14 (私へ) (いたくない) 腹をさぐられる。

受身の対象は「私」、動作は「腹をさぐる」である。例13と同じく、客語を内包した動詞が一単語のように働く場合で、「腹をさぐら—れる」のように考えられる。これは正しいと思われる。

15 世の常の女しくなよびたる方は遠くや。(嵯峨15)

16 おくれ奉りぬる心のぬるさを恥かしく思う給へらるるかな。(若菜上299)

17 泣きし心を忘らえぬかも。(万4356)

18 世の中を憚りて位を譲り聞え給はぬ事をなむ朝夕の御歎きぐさなりける。(藤原265)

15は「世の常の」は形容詞「女し」の「女」だけに係る。「世の常の女」全体を形容詞化すると考えてもよい。16・17も「ぬるさ」「心」が「思う」「忘ら」だけに係っている。しかし自発や可能の対象は「ぬるさ」「心」なので、「ぬるさ—らるる」「心—え」の関係になつて、その点14と異なる。ただ、**A・B**と同じく、主体或は主体の動作に重みをおけば、対象はそれに対立するものとしてヲ格になるのは心理的に自然である。「(吾)—(心を—忘ら)—え」のように、「え」は「吾」に対応しているのであるが、自発・可能は、マホシなどより尙一層概念の独立性が少ないので、文法的には誤りと認めなければならない。18も「事を—歎く」という他動詞を媒介として「事を歎きぐさ」になつたと思われる。「事を」は、「歎きぐさ」の中の「歎く」という他動詞的な概念だけに係る。心理的なつながりはあるが、文法的に正しいとは言えない。

19 かく添ひ給ふ御為などのいとほしきになむ心にまかせて身をもてなしにくかるべき(若菜上365)
(ヲ—他動詞形容詞は前掲のガタシと合せて計4例ある。)

20 行く人をとどめがたみの唐衣たつより袖の露けかるらむ(拾遺321)

ガタシ、=クシなどはマホシよりも他動詞との結合が緊密であると思われるが、次の例もあつて、これらも「身をもてなし—にくし」を認めなければなるまい。

21 ぬば玉の今宵な明けそ明けゆけば朝ゆく君を待ちぐるしきに(拾遺集717—岩波文庫本、諸本マツ)

万葉の「朝行公待苦」(2359)の訓読である。「君を待ち」が「苦し」の対象になつていて、「君」は

「苦し」の対象ではない。これは明かに「待ち」が「君」を包んでいて、13と同じである。

このように、**A・B**も**C**と同じようにマクホシのbとdの中間形式として認めたいと思う。しかしそれは情意形容詞はヲ格をとるという意味ではない。成分の一部である（しかし主たる）他動詞に係る、或は他動詞性の概念を媒介とするものであると解するのである。(9)(10)の「小蓑を欲し」「由利子を好き」でも他動詞性の概念を媒介とし、その他動詞性の概念は「欲し」「好き」とは語性を異にするので、上接成分との承接が完全に正しいとは言えないが、このような概念分離を認める必要があると思う。

D 軽重の差がはつきりしない場合

22 つれなきは苦しきものをと一ふしをおぼし知らせまほしくて(総角192)

これを4と比べると、4は「ゆくへ」に重みをおく気持、22は「おぼし知らせ」という動作やその主体を重ずる気持と言えなくもないが、軽重の差がそんなにはつきりしているわけでもない。

23 侍従が…心浅さを恥かしう思へる程などを今すこしも問はず語りもせまほしけれど(隠生175)

これなどはむしろ対象に重みをおくべき場合である。このように軽重の差があまり無い場合でも、とにかくノカヲを用いなければならないから、いくらかでも重く感じた方の助詞を用いることになったのであろう。

以上をまとめると次のようになる。

- a 対象に重みをおいてそれについて叙述する心持はノになる。
- b 主体又は主体の動作に重みをおけばヲになる。
- c 動詞がその内部構造で、対象を包みながら一語のような働きをする場合はヲになる。
- d 軽重の差のはつきりしない場合は、いくらかでも重く感じた方の助詞を用いる。

ノータイとヲータイの意味の相違を考えた論文が少い中に、遠藤・松井両氏の「私たちのことばと文法」は、両形式とも文法的に認めて、ヲータイは論理的に明確であることを求めるために発生したように説いてある。論理的な明確さを求めるなら、主体によつて統一して…ヲ…マホシク思フとするか、対象によつて統一して…ガ…マホシとするかであるべきである。何を題目にするか、何に重みをおくかという表現のねらいの違いであるというべきである。

III ヲーマホシが従属文に多いわけ

(1) 主文の場合は題目・叙述の関係は意識されやすいので、「私は水を」と言つたらマホシで結ぶのは対応しないというような文法の抑制力がかなり強く働く。しかるに従属文では、その対応意識が主文の場合よりあいまいになりやすい。

(2) 従属文では主文の主語（動作の主体である）の影響を受けやすい。対象をガで言うべき場合でも主体に対立するものとして感じられて、ヲになりがちである。

(3) 主語述語の関係があいまいになれば、単語の一部分の概念と概念との関係になりやすい。

(4) 「思フ」などを省こうとする。「思フ」を付けると重苦しく、動作が余りに強調されすぎる。

24 下家司の殊に仕へまほしきは…と見取りて…(寤生174)

これは、「まほしく思ふ」のように、「思フ」を添えなければならない場合まで省いた例である。そして主語述語の対応があいまいになりやすい従属文の方が「思フ」が脱落しやすかつた。

要するにヲーマホシは文法的には余り完全でないので、その抑制力の少い従属文に多く現われた。主文において僅か1例しかないのを考えると、その抑制力は現代よりは強かつたろうと推察される。

(28年9月西日本國語國文學會発表。30年9月訂正)

註1. 「ガータイ」だけを認める人と、「ガータイ」「ヲータイ」の両方を認める人とある。以前は前説だけであつたが、最近の後説も現れた。遠藤・松井共著「私たちのことばと文法」222；時枝誠記「日本文法一口語篇」279。

註2. 「ガータイ」を古いと見る説には、吉沢先生「源氏隨攷」140；今泉忠義「現代語の性格」115。しかし、史記鈔、天草本平家などによれば、「ガータイ」「ヲータイ」の両方が用いられている。

註3. 佐久間鼎「現代日本語の性格」124，小林好日「国語国文法要義」

註4. 「本が一ある」と対応する。(吉沢先生，源氏隨攷)このようなアルは補助用言に扱うのが普通であるが断定，希望，許可を表す語は補助用言から除くべきである。

註5 松尾博士「助動詞の研究」18にこの歌などから類推して、マにもマク同様，体言的性質があるとのべてあるのに気付いた。しかし，根拠が示してないし，納得もいかない。

